AI時代のよりよいレポート作成支援とは？
－Turnitin Feedback Studio の実践活用から－

まえがき

教育・学修支援センター事務局長　木村　修平

学生の授業満足度の向上にフィードバックの充実や頻度が大きく寄与することは、対面形態が大きく制限されたコロナ禍での授業アンケート分析で明らかになったことです（『学びと成長レポート』特別号）。その一方で、フィードバックの充実に比例して教員の負担が増大することも確認されています（『学びと成長レポート』第2特別号）。良質なフィードバックをいかに効率よく行うかはあらゆる分野の教育現場で模索され続けているテーマであると言えるでしょう。

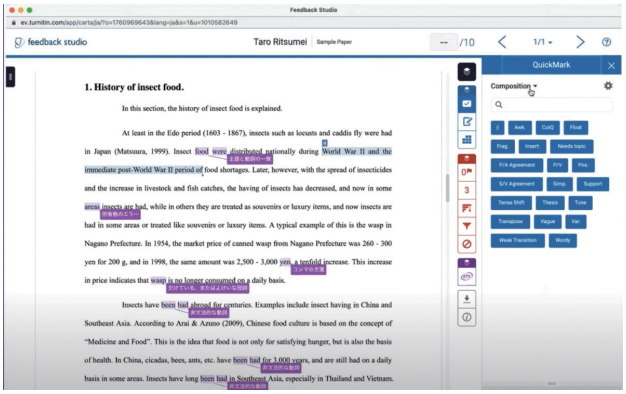
2024年2月14日に開催された2023年度第3回教学実践フォーラムでは「Turnitin Feedback Studio」（以下、Turnitin）に焦点をあてた報告が行われました。本学ではTurnitinを剽窃チェックツールとして2017年度より部分的に導入し、2023年度秋学期からは全学規模での導入に踏み切りました。Turnitinには剽窃防止に役立つ類似性レポート以外にも提出された課題に対してフィードバックを行うための統合的なプラットフォームとして様々な機能が備わっています。

今回のフォーラムでは、まず、創価大学の鈴木道代先生（学士課程教育機構）より全学共通の必修科目「学術文

章作法Ⅰ」でのライティング課題にTurnitinを活用した事例をご報告いただきました。適切な引用方法を学生が理解し実践できているかを類似性レポートを通して確認されているほか、教員による規定のルーブリックに基づいた評価やクイックマークを用いた省力化について詳しくご報告いただきました。

次に、本学の山下美朋先生（生命科学部）より、プロジェクト発信型英語プログラム（以下、PEP）での活用事例をご紹介いただきました。学生自身の興味・関心にもとづいてプロジェクトを進めるPEPでは、ライティングの成果物を教員やクラスメイトのフィードバックを受けて徐々に組み立てるプロセス・ライティングを行い、そこでTurnitinの様々な機能が活用されていました。PEPのようにTurnitinのより良い使い方について教員間でも議論や情報共有を活発に行うべきだというご提案には深く首肯しました。

いずれの報告も、デジタル・テクノロジーを教育の高度化およびフィードバック充実のために活用せんとする現場の声そのものであり、大変参考になると同時に先生方が試行錯誤を繰り返しておられる姿にとても励まされる思いでした。ご登壇いただいた鈴木先生、山下先生、ご参加くださった皆様に心より御礼を申し上げます。



出典：木村修平作成の YouTube 動画
「Turnitin 事始め（教員向け）：QuickMark の設定」より
https://www.youtube.com/watch?v=fCApyds5x0s

学生の引用意識の向上と教員のフィードバック業務効率化に向けたFeedbackStudio の活用事例

創価大学　学士課程教育機構　鈴木　道代

【剽窃チェックから学生の引用意識向上と教員の業務効率化ツールへ】

Turnitin社が開発したFeedback Studioは、剽窃チェックとフィードバックを目的としている。レポート執筆において、剽窃は重要な問題であり、創価大学では、Feedback Studioを取り入れることで、学生の剽窃に対する意識付けを行っている。全学必修のアカデミックライティングの授業である学術文章作法Ⅰ（以下、本科目）では、2019年に、剽窃チェックを目的に100名を無作為に抽出し、Feedback Studioでチェックを行い、一定の効果は認められた。ただし、ここでの課題は、学生自身がセルフチェックを行い、自分自身のレポートを客観的に検討できる必要があるということであった。そのため、2020年以降は、学生にアカウントを付与し、学生自身が使用できるようにした（2021年以降は全学で導入している）。現在、本科目では、このツールを剽窃の抑止だけでなく、学生が自分自身のレポートを自己点検し、また教員がフィードバックの効率を上げることにも使用している。

【引用に関する学生のセルフチェック】

引用に関する学生のセルフチェックが重要である理由は、学生が故意に剽窃を行うことは稀であり、多くの場合は無意識にコピー＆ペーストをしてしまうケースが多いためである。学生の引用に関する意識について、本科目で行っているアンケートの結果からは、学生の多くが、自分が適切に引用できていると感じている。また「Feedback Studioはレポートを書く上で役立つと思うか」という問いについて、「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した学生は88.6%と、役立つツールとして考えており、高い満足度が示されている。しかし実際は、間接引用やデータの読み取りに対する解釈や見解を述べる部分でも引用文をそのまま用いている場合があり、これらの部分に類似度のマーカーが引かれることが多い。つまり、学生は自分がコピー＆ペーストをしていることに無自覚であるということである。このような問題を解決するためには、学生が提出前に自分のレポートをセルフチェックできるよう授業設計を行い、引用を意識化させることが重要である。

【ルーブリックとクイックマークによる評価の標準化】

本科目で、学生へのフィードバックは、レポートのルーブリックの入力とレポートへのクイックマークやコメントの挿入によって行っている。ルーブリックとコメントを同時に使用することで、採点とフィードバックのプロセスを同時に進行させることが可能となる。さらに、ルーブリックとクイックマークを連携させることで、学生へ評価基準に一貫性を持った評価とコメントを提供することが可能となる。この結果、学生はルーブリックに基づいたコメントを受け取ることになり、次回のレポートで何を修正すべきかを明確に理解することができる。

【今後の課題】

Feedback Studioの活用は、学生の引用意識の向上と教員のフィードバック業務の効率化に寄与していると言える。しかし、その効果を最大限に引き出すためには、学生が自主的にアクセスし、自分自身でチェックし、フィードバックを受け取るという能度的学習態度が不可欠である。この問題は、Feedback Studioだけでなく、ICTの活用全般についても同様である。どのように授業内で学生にアクセスを促すかが今後の課題となる。さらに、学生間の情報リテラシースキルの二極化と、それに対応する教育の問題がある。また、Feedback Studioの日本語版は現在のところ生成AIに対応しておらず、類似度に反映されない。これらの課題を解決することで、Feedback Studioの教育効果を最大化し、多くの学生がより有効に活用できると考える。

参考文献
高橋薫 , 佐藤広子「『学術文章作法Ⅰ』における類似度評定ツール Feedback Studio を活用したライティング指導」『学士課程教育機構研究誌』12 号、2023 年、51-59 頁。
二通信子（著・監修）, 佐藤不二子（著）『新訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク、2018 年。
吉村登美子『英文ライティングと引用の作法――盗用と言われないための英文指導』研究社、2022 年。
Turnitin「feedback studio」(https://www.turnitin.jp/%E8%A3%BD%E5%93%81/,2024.2.24)

自律的な書き手を育てる Turnitin Feedback Studio の授業利用

生命科学部　山下　美朋

第二言語ライティング（本稿では英語とする）における修正を促すフィードバックは、書く過程そのものを重要視するプロセス・ライティングにおいて欠かせない。教育心理学者Vygotsky (1978)[1]の発達の最近接領域理論に代表される学習者の能力を伸ばすための適切な足場かけ（scaffolding）でもある。特に、英語の文章においては、教師やクラスメートが口頭または筆記で文法、語彙、内容、論理構成、句読法の間違いや文章そのものがさらに良くなるようなコメントを行うことを指し、1980年代頃からは大規模テストに対応するための自動添削・自動評価システムも開発されている。これらのシステムは、人が施すフィードバックや採点よりも正確で、即時性かつ利便性の高さから特にコロナ期を中心に利用が加速しており、今年度から立命館大学全学に導入されることになったTurnitin Feedback Studioもそのひとつである。

自動添削・自動評価システムがライティング指導において注目されているのは、「自律的な書き手」を育てるフィードバックの目的に適しているからである。フィードバックはテキストの修正をするだけが目的ではなく、学生が自分で文章を修正し、より良い文章が書けるように支援することが目的である。Turnitinには学生の自律性を育てる様々な機能があり、筆者が所属する生命科学部のプロジェクト発信型英語プログラム（PEP[2]）では試験的な導入により学生が自分の書いたものに責任が持てる姿勢の涵養に努めてきた。本プログラムでは、学生は各々の興味・関心に基づいてプロジェクトを遂行し、その成果を口頭で発表したり、2回生の秋学期には約2000ワードの論文にまとめる。アイデア出しから論文の最終稿の仕上げまでいわゆるプロセス・ライティングに則って指導を受けるのだが、その過程でTurnitin Feedback Studioを利用している。

特に本授業では、学生が課題をmanaba+Rに提出する際に、自分で剽窃に値する部分がないか確認し、最低限の間違いを見つけ修正を促すために使用している。剽窃チェックに関しては、Turnitinが、他から引用した部分を数値とともに指摘してくれるため、学生は引用が正しくできているかを自分で見て確認することができる。そして、e-raterが組み込まれているため、主語と動詞の一致や、動詞の形などの文法の間違いと、スペルミスなどの句読法の間違いがあれば指摘され、それらを自分で調べながら修正できる。教員がe-rater以外の指摘をしたい場合は、Quick Mark機能で前もってタグとして登録することもできるため、筆者は、文法や表現以外の間違い、例えば「論理の逸脱」や「説明不足」など内容に関するタグを登録して修正フィードバックを与えている。また、クラスメート同士で行うピア・フィードバック活動は、お互いのものを見ることで自分の文章を客観的に見直し気づきを与えるとして重要視されているが、Peer Mark Review機能を用いて教員が登録したチェックリストに基づきお互いの英文の添削や評価を授業内で行っている。

このようにTurnitin Feedback Studioの便利な機能を用いて、学生が自律的に英文を書いて行く姿勢を育ててはいるが、解決すべき問題もある。筆者が2023年度春学期に行なった調査(AILA, 2023)[3]では、フィードバックをTurnitinでのみ与えたグループと、Turnitinと教員の両方で与えたグループとでは、後者の方がその後の学生の修正成功率が高かったのである。この結果から分かったことは、1) Turnitinは文法や句読法などの間違いを指摘するが、正しい修正は提示しないため、間違いを正しく修正できるかは学生の習熟度による、2) ツールの扱いに慣れていない学生がいる、3) 学生自身が教員のフィードバックを好む傾向があるということであった。

Turnitinに代表される自動添削・評価システムを授業で効果的に使うためには、まず教員がツールの機能の何が使えるのかを判断して使い方に習熟し、学生に慣れさせる必要がある。Turnitinの機能は優れてはいるが、Peer Mark Reviewなどは細かい設定も必要であり、授業内で学生と画面を共有しながら使うのが賢明であろう。なにより学生が十分に使い方を理解してこそ、自律的な修正が行えるのである。PEPでは教員と学生それぞれに向けた使い方の動画も作成しており参照されたい[4]。そして、教員のフィードバックへの負担を軽減させるためにも、e-raterに文法・句読法の間違いを任せ、教員は論理構成や内容へフィードバックを焦点化させることができる。あくまでツールを補助的にかつ効果的に使うことで、教員は「自律的な書き手」を育てるライティング指導に勤めて行くべきであろう。

1. Vygotsky, L. S. (1978). Mind in society: The development of higher psychological processes. Harvard University Press.
2. 本プログラムの英語表記は Project-based English Program であり、通称 PEP と呼んでいる。
3. Yamashita, M., Kondo, Y., Yamanaka, T, Kimura, S. (2023, July, 20th). “Pedagogical impacts of automated writing evaluation system on both students and teachers in English learning environments in Japan.” AILA 2023.
4. Turnitin 動画 PEP on YouTube https://www.youtube.com/watch?v=H72gTMvzGrs&t=6s

RITSUMEIKAN
立命館大学教育開発推進機構　〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
TEL：075-465-7865　FAX：075-465-7874　email：fd71cer@st.ritsumei.ac.jp　http://www.ritsumei.ac.jp/itl/
発行日：2024 年 3 月　　編集・発行：立命館大学　教育開発推進機構